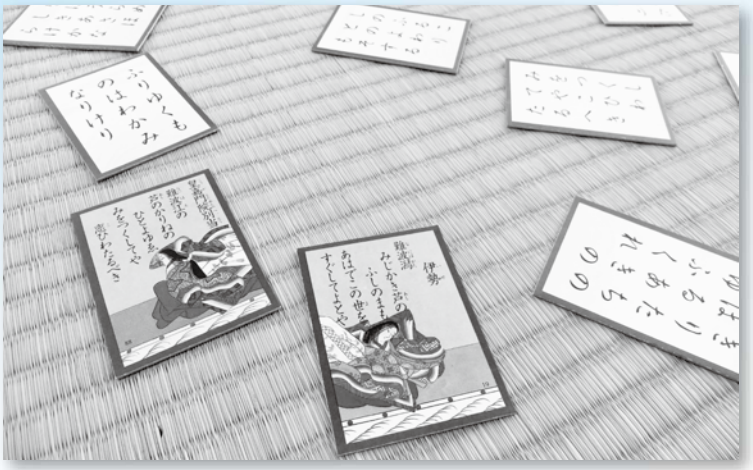
おおさか KEYわーど 第42回

新年になにわの〝葦〟はなに思う

〝人間は考える葦である〟［パスカル］というが…



小倉百人一首

古代より“なにわ”を象徴するのが、茅渟の海と呼ばれた大阪湾の葦であった。藤原定家が編集したという「小倉百人一首」はお正月らしい優美な遊技であるが、そのなかにも「難波潟みじかき葦のふしのまも　あはでこの世をすぐしてよとや（伊勢）」、「難波江の葦のかりねのひとよゆゑ　みをつくしてや恋ひわたるべき（皇嘉門院別当）」など、なにわの葦を詠みこんだ恋の歌がある。

大坂最初の本格的な名所案内記のタイトルも「難波名所　蘆分船」だ。延宝3（1675）年に刊行され、六巻六冊から成る本書では、大坂と近郊の名所や旧跡など72項目が紹介されている。さらに江戸時代の大坂で“葦”といえば、博物学者にして膨大な蔵書を有し、文人画も描いた“知の巨人”こと、木村兼葭堂（1736−1802）だろう。西長堀の市立中央図書館の横に邸宅跡の記念碑があるが、兼葭堂という号も、自宅の井戸を掘って出た葦の根を、古歌に詠まれた浪華の葦と考えて命名された。「兼葭」とは中国古典で葦のことである。

しかし、いにしえの大宮人の恋歌に詠まれたなにわの葦も、近代になると少しおもむきが変わってくる。アナーキズム詩運動に加わり、戦後「大阪文学学校」を設立した詩人の小野十三郎（1903−1996）は、昭和14（1939）年の詩集『大阪』、昭和18（1943）年の『風景詩抄』などで、工場の煙突や高圧鉄塔が建ち並ぶ非人間的で凄惨な光景を臨海地区に見出し、その一帯を「葦の地方」と呼んで、抒情性を否定した新しい詩の世界を創造した。小野が「葦の地方」を発見した最初とされる詩である「明日」は次のようにはじまる。

古い葦は枯れ
新しい芽もわづか。
イソシギは雲のやうに河口の空に群飛し
風は洲に荒れて
春のうしほは濁つてゐる。
枯れみだれた葦の中で
はるかに重工業原をわたる風をきく。
おそらく何かがまちがつてゐるのだらう。
すでにそれは想像を絶する。　（以下略）

煤煙が空を覆った戦後高度成長期の公害などを思えば、すでに戦前に詩人の感性が見出した「葦の地方」は、古代からのなにわの歴史と、大工業都市へと変貌していく近代大阪が複雑にからみあったものと言えよう。

現代では、護岸整備などによる葦原の減少による保存問題もあるが、別の形でなにわの葦を再生しようとする動きがある。“東洋のベニス”と言われた“水都大阪”を再生しようと活動している「水都大阪を考える会」（代表・藤井薫）は、平成18（2006）年の「新淀川開削100周年記念イベント」で、地域住民と一緒に淀川河川敷で葦を刈って二隻の葦船を造り、中津と十三の両岸から進水させて淀川を渡った。葦船は5人乗りの大きいほうで7.7mもあり、別の機会では道頓堀川にも進出し、戎橋界隈をデモンストレーションした。

この道頓堀川の源流とされる「梅川」があったのが、落語の舞台としても有名な高津宮（大阪市中央区）である。平成25（2013）年の秋、その参道にあたる石段に、巨大な葦船が出現して人々を「オッ!」と驚かせた。伊原セイチさんの《とこしえの舟》である。伊原さんは、住吉公園のポプラが切り倒されるのを惜しみ、「おおさかカンヴァス推進事業」で《きのむかうところ》を制作した芸術家で、この葦舟も実際には水に浮かべることはできないが、同宮秋祭の新しい象徴として、なかには二万年の時空を超えた吉野の神代杉が乗せられている。巨木をはじめ自然のもつ生命力に魅せられるとともに、制作過程も含め、さまざまな人と人のむすびつきを大切にして、人を感動させる芸術作品を制作する伊原さんだが、《とこしえの舟》も地域の人たちの連帯を強めることになった。

「人間は考える葦である」というフランスの思想家パスカルの言葉は有名である。現代のなにわの葦を取り巻く人たちも、時空を越えた様々な思いや願いを、このしなやかで軽やかな植物に託して熱く熱く語るのである。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村兼葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。